

名古屋の地形 4 河川とため池

(1) 名古屋市の河川

図1は名古屋市内の河川と池の位置を示しています。最も主要な河川は庄内川で、本川のほか、新川、矢田川など多くの支川を持っています。市内の多くの河川は大きな水源をもたず、処理水に頼っている河川もあります。ここでは、紙面の都合上、庄内川を中心に紹介します。

庄内川は、恵那市山岡町の夕立山（標高727m）に源があり（図2）山間部を流れた後、春日井市付

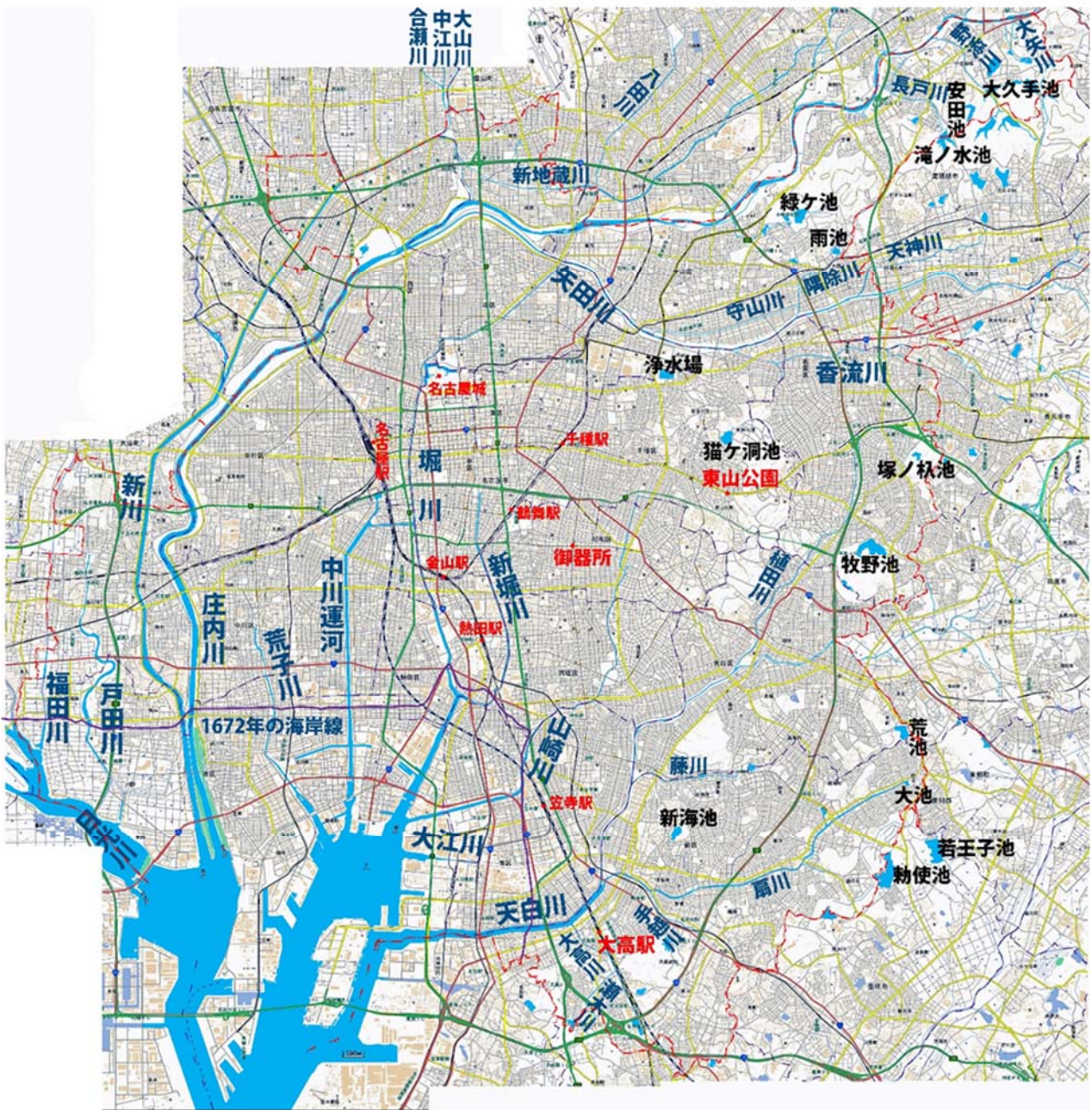


図1 名古屋市内を流れる河川と池（地理院地図に加筆して作成）

近から濃尾平野に出てきます。地域によって「土岐川」「玉野川」「勝川」「枇杷島川」「番場川」「一色川」「御厨川^{みくりやがわ}」などのように様々な名でよばれました（愛知県内は庄内川、岐阜県内は土岐川と呼ばれることが多い）。庄内川の名称は、流域に山田荘などいくつかの荘園があったことに由来するといわれます。途中に瑞浪、土岐、多治見などいくつかの盆地で砂礫を堆積して下ってくるため庄内川には扇状地は発達しません。猿投山からの矢田川と合流し、伊勢湾に注いでいます。繰り返す氾濫を起こす河川であったため、庄内川下



図2 庄内川 夕立山

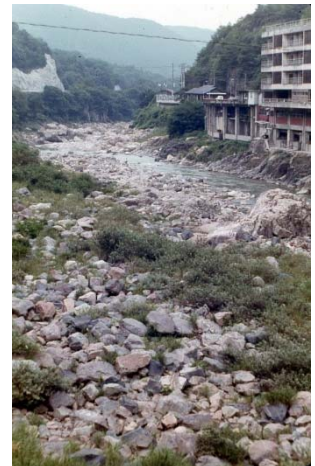


図3 庄内川 定光寺

流右岸地域の排水と名古屋城下を守るために江戸時代中頃、新川の開削^{あらいげき}や洗堰^{あらいげき}の築造が行われました。洗堰は新川中橋の少し下流の庄内川の右岸堤が長さ 100m ほど高さが低くなっているところで、洪水時に北側の遊水池（大蒲の沼）に流すためです。2000 年の東海豪雨後に



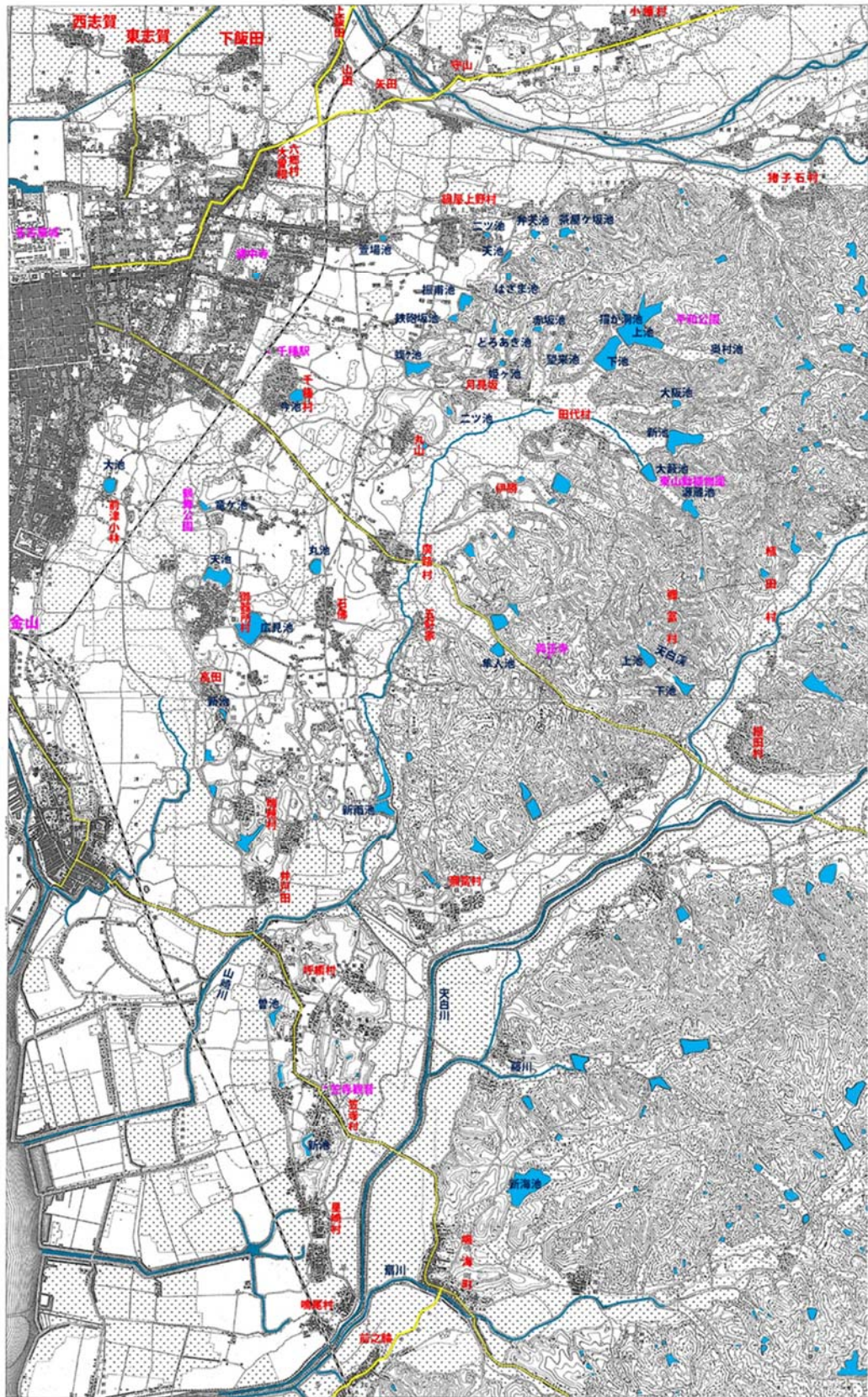
図4 庄内川 春日井市



図5 庄内川導流堤（左が庄内川，右が新川）

修復されていますが今も低くなっています（将来的には改善するそうです）。庄内川は現在も天井川化が進んでいます。庄内川の河口では新川との間に導流堤がつくられています（図5）。流水の方向や速度を一定に保って、土砂の堆積を防ぐなどの働きをします。矢田川は瀬戸市・豊田市境の戸越峠付近に発し、西区の庄内川橋のすぐ上流で庄内川に合流する河川です。香流川は、長久手市東南端の丘陵地の三ヶ峰^{さがみね}に発し、名東区を流下して、千種区内で矢田川に合流します。堀川・黒川は前号を参照してください。新堀川は中区の堀留水処理センターから流れ、熱田区七里の渡しで堀川に合流します。もともとは、現在よりやや東寄りの位置を精進川^{しょうじんがわ}という名で流れていた河川ですが1910年、「熱田兵器製造所」建設と水運確保を目的に改修され、新堀川と改称されました。鶴舞公園は、この改修工事の土砂を使って造成されました。精進川は大曾根層が分布する南端付近から流出する蛇行河川で、江戸時代から氾濫を繰り返す低湿地帯を流れていました。山崎川は、千種区猫ヶ洞池から市の中東部を流下します。上流部では「石川」「川名川」などと呼ばれました。猫ヶ洞池からの導水のほか、名古屋大学構内の鏡池からの放流水、地下鉄川名駅構内に湧出する地下水、五軒家川からの流入水のほか、中流域で山崎川に直に湧出する地下水と山崎水処理センターからの放流水です。猫ヶ洞池には山崎川の洪水防止を目的としたベルマウス（余水吐）が設置されています（会報 no.4 参照）。天白川は、日進市米野木町の三ヶ峰付近（香流川水源地のすぐ南：名古屋商科大学の西南隣接地）に発し、中・下流域は年魚市潟と呼ばれた入江でした。標高が低く、多くの地域でポンプ排水が行われています。日光川は、江南市前飛保町の曼陀羅寺^{まんたらじ}付近に発し、尾張西部地方を南に流下して港区・飛島村境に流出します。下流部は海拔ゼロメートル地帯であるため、流域全体の約2/3の地域ではポンプによる強制排水が行われています。戸田川は、名古屋市西部を流れる河川で日

光川の支流です。かつての地下水汲み上げを原因とする地盤沈下で、日光川の下流域では支流の自然流下が困難で、合流部に置かれた戸田川排水機場でポンプによる放流を行っています。



赤字は当時の
ピンク字は現
在の地名です

図6 明治時代のため池(地理院 1893 発行の 2 万分の 1 名古屋と熱田図幅を合成したものに加筆)

(2) ため池

「池」は湖沼学では人工的に造ったものとされます。名古屋市東部の尾張丘陵地帯（千種区、名東区、天白区、緑区、守山区など）には主に農業用の多くのため池がありました（図6）。シルト層や粘土層（難透水層）と砂礫層（透水層）が不規則に堆積した東海層群の分布が影響していると思います。都市化に伴い、埋め立てられたり（公園や学校などになっています）、公園の池として整備されたりしたものが多くあります。山間部の谷の入り口を堰き止めた^{たにいけ}谷池が多いようです。

猫ヶ洞池は千種区の平和公園にあります。江戸時代に農業用ため池として作られたもので、1664年に上池が、1666年に下池が完成しました（昭和になって埋め立て）。江戸時代にはここを水源とする猫ヶ洞用水が作られて御器所方面の灌漑用に使われたほか、大曾根屋敷（現在の徳川園）付近にもここからトンネルを掘って水を供給していたそうです。荒池は江戸時代に湿地を堤防でせき止めて造られました。



図7 猫が洞池（千種区）



図8 荒池（天白区）



図9 牧野池（名東区）



図10 海老蔓池 守山区

た。牧野池は、江戸時代の1646年に灌漑用として築かれたため池で、市内でも最大規模（16ha）です。^{えびつる}海老蔓池は滝ノ水池とも呼ばれます。海老蔓池一帯の森林は、江戸時代から尾張藩の留山で保護されていたようです。今池は今池中学校とその東側北側の住宅街まで含まれる池で、「馬池」由来は過ちだという指摘があります。池下は1922年まで存在していた^{まむしがいけ}蝮ヶ池（面積6000坪）から名づけられました。御器所村には広見ヶ池（現在の向陽高校・桜山中学校付近）、龍興寺池（天池：現在の荒畑の西）という比較的大きな溜池があり、猫ヶ洞池の水が供給されていました。天白溪（現在の天白溪とは場所が違います）は景勝地としてよく知られていましたが、上池は埋め立てられてグラウンドとなり、下池も大きく縮小されています。

主な参考引用文献

- 伊藤厚史，2020，再発見！なごやの歴史と文化．風媒社，166p.
- 杉野尚夫，2017，名古屋地名ものがたり．風媒社，132p.
- 村松憲一，2007，名古屋の大地とその生い立ち．91p.
- 村松憲一，2019，愛知県の地質とジオサイト 第二版．189p.